

## 学生相談における親への支援

李 敏 子\*

### はじめに

近年、大学において保護者への対応が教育や学生支援の一環として行われるようになってきた。高石（2010）は「今日の大学においては保護者への関与が学生支援の一環として積極的な意義をもち、また実際にもさまざまな支援が行われている」と述べている。また、①カリキュラムやシステム、②事務職員の窓口対応、③教員の指導、④学生生活、⑤就職をめぐって、親が苦情を申し立てたり要求をしていくことが増えているが、これらの事例に共通するのは「学生が、大学生活で生じた困難を、学内の社会的な人間関係のなかで解決しようとするのではなく、まず親に訴え、親がわが子と同じ心境になって大学に要求してくるという構造」であるという。このような親子関係の特徴を高石（2010）は、「子育て現役意識を持ち続ける親と、庇護され育てられる側からなかなか抜け出せない、思春期心性を生き続ける子どもの関係性」であるとしている。岩田（2007）によれば、入試の時点において、親の意向の大学受験や、入学願書を親が書く例などが見られるという。このような現状から、学生相談においても保護者支援に関する研究がふえており、各大学の学生相談機関の刊行物にも学生の親子関係や家族支援をテーマにした論文や特集が掲載されるようになった。

本学学生相談室においても、学生本人だけでなく教職員との連携や親への対応がふえている。本学の来談学生数は平成27年度181人、平成28年度157人とやや減少傾向にあるが、相談回数としては1,578回から1,593回へと微増している。一方、学生以外の利用者数は、平成27年度87人、平成28年度123人であり、36人増加している。内訳をみると、親（29→38人）、教員（28→47人）、職員（30→38人）のすべてが増加している。学生以外への対応回数についても、平成27年度317回（全体の16.7%）、平成28年度513回（全体の24.4%）であり、前年に比べて1.6倍も増加していること、全相談回数の約4分の1を学生以外への対応が占めていることがわかる。内訳をみると、親（90→202回）、教員（102→149回）、職員（125→162回）のすべてが増加しているが、とりわけ親との相談回数は2.2倍も増加しており、親への対応がふえていることがわかる。

このことは何を意味するだろうか。教員との連携については、実際の授業場面などにおいて教員が学生への対応に困るようなケースが増えていること、他方、学生の側からいえば授業場面などにおいて教員から一定の配慮を必要とするケースがふえていることがあげられる。親への対応については、学生相談において、学生を支援するためには、親との連携が必要なケースがふえてきたと言える。近年の大学生への支援においては、親から自立した存在として学生の内面にアプローチするというより、親との密着した相互依存的な関係にある学生がふえていることから親への支援も不可欠であると考えられる。

---

\* 人間関係学部教授 学生相談室長

## 親との連携が必要なケース

### 1. 配慮願い

精神症状や発達障害があるため授業において配慮が必要であり配慮願いを作成する場合、学生本人だけでなく親からも生育歴や診断を受けた時期など事情を聴いて、配慮願いの内容について説明し合意を得られるように面談を行う。学生に発達障害が疑われ、学生自身も発達障害の診断を受けることを願っているが、親がそれに強硬に抵抗して受診させない場合がある。そのような場合は、診断名そのものよりも、具体的に学生が何に困っているか、具体的にどのような支援が必要であるかをていねいに説明することが必要であるが、親の抵抗を無視して対応を進めることはできないため、親の心情への慎重な配慮が求められる。

### 2. 自殺の危険

切迫した自殺の恐れがあると判断した場合には守秘義務は解除されるが、できる限り本人の了承を得て親に連絡をとり来室してもらい、状況を説明して医療機関受診を勧める。就活の葛藤などから自殺念慮が生じている場合、家庭でそのような刺激や圧力を加えずに見守るようお願いする。たとえば学生自身は満足して就活を終えているのに、親がもっと良い会社に勤めるようにと強く圧力をかけているような場合がある。このような場合、幼少時からそのような親子関係が続いており、子どもが言い返せないような関係になっていることが多い。両親のどちらか一方が強い圧力を加えている場合に、もう一方の親は存在感が希薄で、それを制止したり緩和したりできず言われるままになっていることがある。母親が強力な場合の父親、父親が強力な場合の母親は、その圧力から子どもを守るよりも、逆らって波風を立てたくないという自分の保身を優先している。このような場合、子どもから見ると、自分を守ってくれる存在として親を信用することが難しくなるだろう。

### 3. 事故・事件の加害者・被害者

事故・事件の加害者・被害者の場合、いずれの場合も親の衝撃は測りしれないため、本人だけでなく親へのサポートも必要である。心理的なサポートだけでなく、かつて経験したことのない裁判などの法的手続きへの現実的な対応が必要になるため、それに戸惑う親をサポートすることが重要である。

### 4. 精神障害

学生に精神症状がある場合、親に連絡をとり事情を説明して医療機関受診を勧める。本人は親に言いにくい場合もあるが、本人を説得し了承を得て親に説明する。とりわけ精神症状が重篤で、学内で学生自身が症状をコントロールできない場合は、本人の調子が悪そうときは学校を休ませるなど、しばらくは親に学生の状態を管理することをお願いし、本人が医療機関で薬物療法などを受けて症状を自分でコントロールできるようになるまで家で休養することを勧める。例えばパニック障害があっても、発作が起きそうになったら教室を出て休憩する、頓服を服用するなど、自分なりの対処法を身につけることは精神症状からの回復においても重要なことであるから、このような自己コントロールの力をつけてもらうことを優先的課題とする。そのうえでも不測の事態が生じることはあるためその場合は緊急対応することになるが、本人にストレスや負荷がかかっているときにそのような事態に陥りやすいことから、その場合も親に連絡して、しばらく本人のストレスを減らして休養してもらうことを勧める。

## 5. 他害などの問題行動

学生に暴力行為などの問題行動が見られた場合も、親に連絡をとり事情を説明して医療機関受診を勧める。暴力行為は多くの場合、衝動性や被害妄想などの精神症状によるものであり薬物療法が有効なことが多い。従って4と同様に、しばらくは親に学生の状態を管理することをお願いし、薬物療法などを受けて状態が安定するまでは家で休養をとることを勧める。学生のお害行為は、他の学生の安全を脅かすため、大学としてだけでなく、もちろん一般社会でも許容できるものではないため、学生相談においても毅然とした対応が必要になる。

## 近年の青年期の親子関係

近年では親子で就活や、親による子どもの婚活などが見られるが、なぜ親子の密着した関係が続き、親離れ・子離れが難しくなっているのだろうか。社会的要因として、都市化、核家族化、少子化、また子育てが「社会の公共的・共同的な営み」ではなく「親の私的な営み」となり、共同社会から独立して「私化」した（滝川、2017）ことがあげられる。家庭という密室のなかでの私化は私物化につながりやすく、とりわけ母親が子どもに一方的に一心同体化しやすくなり、過干渉・支配が続きやすい。特に日本社会では、子どものいわゆる成功は母親の業績として評価される傾向にあり、書物を見ても「子どもを～に育てるための母親の子育ての方法」といったテーマのものが多く見られる。逆に、少年犯罪など子どもが大きな逸脱行動を起こしたとき、社会において親への責任追及が目立つようになった（滝川、2017）ことも、この傾向を表すものである。このような社会的圧力のもとでは、母親が評価を得るために、子どもを自分の願望通りに育てようとする傾向に拍車がかかるであろう。

子育てを担う母親は、親に絶対的に依存している幼少期の子どもにとっては絶対権力者であり、子どもが親の意向に逆らうことは難しい。児童期においてもその関係は続くが、思春期の親子関係は、児童期までの親から子どもへの一方向的な権威を示す関係から、相互性を持った関係へと相互調整的に変化していく（久世・平石、1992）。水島（2012）によれば、思春期は「役割の変化」の時期であり、子どもは保護者に従属する立場から独立した大人へと変化していく。それは親にとっても「関係性の変化」、わが子の「異物化」を意味し、衝撃として体験されるという。

平石（2007）は、中学生の子どもをもつ母親を対象に面接調査を行い、思春期の子育てで心がけていることとして、「子どもの自我の尊重」「威厳ある姿勢」「適切な心理的境界」「感情統制」の4つの側面を抽出した。つまり、子どもを一個の人格として対等に接し、威厳をもち、子どものプライバシーを尊重し、親自身の感情をコントロールするように心がけていることが明らかになった。しかし幼少期から児童期にかけて子どもを自分の思い通りにしてきた母親にとって、思春期に子どもへの態度を変えることは困難であることは想像に難くない。そのため、それまでの親子関係が青年期から成人期にかけても続くことになり、親が子どもの自我を尊重し、適切な心理的境界をもち、自分の感情をコントロールすることが難しくなる。親がすぐに口を出さずに見守る、自分の考えを言う前に子ども自身の考えを聴く、子ども自身の考えを尊重する、子ども自身に任せるということが、たいへん困難な課題となっている。実際には、子どもの意向を聞く前に、親が自分の願望を先に

押しつけ、子どもがそれに従うまで嘘や脅迫などを巧妙に使いながら言い続けることがある。これは一種のマインドコントロールの効果をもち、子どもは従うしか方法がなくなってしまう。また、逆らうことに子どもは罪悪感をもたされるのである。このように子どもが成人してからも、子どもに支配力を行使している母親が少なくないように思われる。大学における学生支援においても、学生に質問したことに対して、学生は黙っているのに間髪入れずに親が答えるという場面に遭遇する。

子育てを担う母親が、子どもが思春期を過ぎても、自分の衝動や感情の抑制がききにくく、社会にも家庭にもそれを抑制するしくみが不足していることが問題としてあげられる。家庭という密室において、父親が積極的に子育てに関与せず傍観者であることが多いこと、核家族であるために他の助言者が存在しないことが、この傾向に拍車をかけているように思われる。母親の家事労働の負担が軽減され、余った時間とエネルギーをすべて子どもに注ぐことになるが、それがより良い大学、より良い就職というように親の願望によって進められていく現状がある。

### 青年期の自立と依存

大学生の課題としては、アイデンティティーの確立と親からの精神的自立があげられる。自立は孤立とは異なり、依存の対象が親から友人や恋人へと移行していくことである。また自立は依存と対立するものではなく、より成熟した相互の依存関係を他者と結ぶことである。さらにアイデンティティーの確立は、自分一人で可能になるのではなく、他者との関係に支えられて進んでいくプロセスである。人が自分について知るには他者という鏡が必要だからである。このように成熟した依存はアイデンティティーの確立とも密接に関連していると言える。

高橋（1968）は、健康な成人にも依存欲求があり、それが充足されることが自立には必要であると連続性を仮定し、依存が変容し成熟した状態が自立であると述べた。依存性とは、「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である」と定義される依存欲求を充足するためにひきおこされる依存行動のパターンであり、自立は以下の3つの方向において生じる依存性の発達により可能になるとした。①依存の対象が分化し、数が増加し、範囲が拡大する。②依存の様式が身体的・直接的なものではなく、間接的・象徴的なものへと変化する。③依存要求の充足の仕方が直接的から間接的、あるいは現実的から象徴的になる。

関（1980）も「成熟し、適応的な人間とは、孤立した存在ではなく、時に応じて、他者と相互依存的な関係をもつことができ、且つ、そこから得た安定感をもとに、自立的な行動をとれる人間である」とし、臨床的に依存傾向の欠如や依存の拒否の問題性が知られていることから、成熟した依存は適応的な意味を持つがその欠如は否定的な意味を持つと仮定した。そして依存性のあり方を「依存欲求」「依存拒否」「統合された依存」の3因子から測定する尺度を作成した。大学生を対象に調査した結果、依存性のすべての因子で女子の方が男子よりも得点が高く、統合された依存性は肯定的な自己像と関連し、依存の拒否は否定的な自己像と関連した。従って、成熟し統合された依存性は適応に肯定的な意味をもつことが明らかになった。

高坂・戸田（2006）は青年期における心理的自立尺度を作成し、自分の価値観に基づい



て判断し行動できる「価値判断・実行」因子、自分の感情をコントロールし自分や外的事象を客観的に見ることができる「自己統制・客観視」因子、現在の自分の状態を理解しそれをもとに将来を考え努力できる「現在把握・将来志向」因子、周囲の人と同調し他者と適切に関われる「適切な対人関係」因子、社会的な知識や社会における自分の役割を理解できる「社会的知識・視野」因子の5因子を抽出した。この5因子すべてが統合的依存性と有意な正の偏相関を示し、依存欲求と有意な（または有意傾向の）負の偏相関を示した。この結果から、成熟した依存性が高いほど心理的自立が高くなることが示された。

このように自立に関しては青年期を対象とした調査が多いが、自立は青年期に完了するものだろうか。社会学の領域において田中（2010）は、さまざまな調査から20代の親子関係の実態は、それまでの期間同様に同伴行動や親から子への家事・金銭的援助が継続し、それらの相互性を通して情緒的親密性が維持されること、そのため心理的には20代で親子関係が依存から自立へと転換するのではなく、一方向的な依存から親子相互に依存的な関係への転換こそが自立であると述べている。「関係のなかでの自立」、すなわち「親子が互いに適切な距離をもちながら『大人』としての依存を前提として、離家や恋人をつくるという経験を通して、親との関係を（再）編成すること」が、若者にとって自立が達成されるモデルであるとしている。

### 母娘関係の特徴

父・母と息子・娘の4つの組み合わせによって親子関係は異なる特徴をもつが、とりわけ母娘関係においては「一卵性母娘」と言われるような密着した関係が続くことが指摘されている。

水本・山根（2011）は青年期の母娘関係を、「母子関係における精神的自立尺度」の2因子である「母親との信頼関係」および「母親からの心理的分離」の得点の高低の組み合わせにより、4つの類型に分けた。すなわち母親との間に信頼関係が築かれず心理的に分離していない「依存葛藤型」（「信頼」低、「分離」低）、母親との信頼関係を築かず心理的には分離しているといったように母親との関係が希薄な「母子関係疎型」（「信頼」低、「分離」高）、母親と信頼関係を築いているが心理的に分離していない「密着型」（「信頼」高、「分離」低）、母親との信頼関係を基盤として心理的に分離している「自立型」（「信頼」高、「分離」高）である。この4類型と自我同一性地位との関連を調べた結果、依存葛藤型では「同一性拡散」が多く「同一性達成」が少なかった。母子関係疎型では「早期完了」が少なく「同一性達成」が多かった。密着型では「早期完了」が多かった。自立型では「早期完了」「同一性拡散」は少なく「同一性達成」が多かった。このことから、同一性達成には母親からの心理的分離が関連していることが明らかになった。また、母親との信頼関係は自尊感情や愛着の安定性と関連していた。そのため、母親との安定した愛着をもち自尊感情が高い「密着型」から心理的に分離して「自立型」に移行する「密着型→自立型」が適応的な自立のプロセスを示す一方で、「依存葛藤型」から自尊心は低いながらも母親と心理的に分離して自我同一性を達成し「母子関係疎型」へと移行する「依存葛藤型→母子関係疎型」は精神的適応の低い自立のプロセスを示すことを示唆した。

さらに水本（2016）は青年期の母親との親密性が娘の精神的自立に与える影響を検討するために、「母親との親密性尺度」を作成し、「母親への心づかい」「母親への絶対的安心

感」「母親の価値観への捉われ」の3因子を抽出した。このうち「母親への心づかい」は「母親からの心理的分離」に正の影響を及ぼしたが、「母親への絶対的安心感」と「母親の価値観への捉われ」は「母親からの心理的分離」に負の影響を及ぼした。つまり、「母親への絶対的安心感」と「母親の価値観への捉われ」といった依存的な親密性が高いほど母親からの心理的分離は困難になることが示された。

青年期以降の親子関係について渡辺（1997）は、否定的な意味をもつ他者への情緒的依存を「依存」、他者との相互理解・信頼関係に基づき他者を心の支えにできる肯定的・情緒的結びつきを「絆」と定義して、青年期から成人期にわたる父・母との依存関係を分析した。その結果、高校生から50代にいたるまで娘と母親との依存・絆関係が他の関係より際立って強いこと、娘と母の強い結びつきと同時に対等関係も50代まではほぼ一貫して維持されることを明らかにした。このことから、女性においては母に依存的であることが母と対等でないことを意味せず、青年期に母親への依存から離脱・独立するのではなく、距離の近さを保ちながら自立していくと考えられる。しかし母娘の強い親密な関係意識には、絆という肯定的側面と依存という否定的側面が分離されずに含まれているため、依存の否定的な意味である「もたれあい」「共依存」も含まれる可能性がある」と指摘している。

一方、高木・柏木（2000）の母親を対象にした調査によると、母親は息子よりも娘からの情緒的サポートを圧倒的に多く受けていた。また、息子と娘に対する期待・感情は異なり、将来への世話期待、人生への関与・介入、自分の理解者だとする気持ち、自分と一心同体であるという気持ちのすべてにおいて、息子より娘に対しての方が高いことが示された。娘に対して最も高かったのは将来への世話期待であった。「母は娘に対して、親しい感情を持ち、将来にわたり自分とつながっていることを期待しており、心理的距離が近いこと」、そのため「娘との境界が曖昧になり、結果として娘の人生に支配的に関与する可能性」を示唆した。さらに、この母娘関係には夫との関係が影響しており、夫からの情緒的サポートが多いほど、また夫との相互愛情・信頼感が高く、夫とのコミュニケーションが円滑であるほど、娘が理解者であるとする気持ちや一心同体感を持たなくなることが示された。これは臨床的事例においても多く指摘されてきたことであるが、夫婦関係において満たされない母が、その余剰エネルギーを子ども、とりわけ娘に対して向けることが、調査結果においても明らかになった。このように母と娘は相互依存的な関係を生涯にわたってもち続けるが、夫との関係が良くないと、娘との境界が曖昧になり支配につながる危険性が考えられる。

共依存とは依存されることに依存することであり、共依存に共通する行動特性として、他者の世話に夢中になり、他人を思い通りにコントロールしようとするものがあげられる。共依存者は、他人に必要とされることを必要とし、他人が自分の仕事・役割に感謝して自分の支配下にいることを求めるが、親子関係のように上位と下位が明確である関係で露骨に表現される（斎藤、1999）。三砂・竹原・嶋根・野村（2006）は母親との関わりに対する肯定的な気持ちを表す「親密」、母親が娘に対してコントロールや過剰な接触をしていることを表す「支配」、母親に受け入れられているという感覚を表す「受容」、母親の期待にこたえようと行動する傾向を表す「服従」の4因子からなる母娘関係尺度を作成した。この尺度には「支配」因子と「服従」因子が含まれていることから、母と娘の共依存関係を得点に反映することが可能である。親子の共依存関係とは親が愛情という名を借りて子

どもを支配していくことであり、思春期の子どもの問題行動の背後には母親との共依存関係があることが多い(信田、1998)。藤田・岡本(2009)は女子大学生を対象として質問紙調査を行い、三砂ら(2006)の尺度を因子分析した結果、2因子構造を抽出し、「支配」因子と「服従」因子が結合した第一因子を「共依存」、「親密」因子と「受容」因子が結合した第二因子を「絆」と命名した。「共依存」はアイデンティティー確立と負の相関を、「絆」はアイデンティティー確立と正の相関を示したことから、母と娘が共依存の関係にあるほどアイデンティティー確立が困難になることが示された。

加藤(2012)は、夫や息子の世話をする立場にある母親にとって、娘だけが家の中で自分を癒し支えてくれる人となると述べている。ここに見られるのは母の娘への依存である。母親アイデンティティーが大部分を占める場合、頭の中には子どものことしかなくなり、それが支配へとつながりやすい。虐待(child abuse)をする親と子の関係においても、親の子どもへの依存がみられ、親の願望や衝動をみたす手段として子どもを乱用(abuse)しているのである。共依存関係にあると、娘は親の支配から離脱できず、その結果、自己決定や主体性をもつという積極的自立が妨げられる。母と娘の関係については、『母が重くてたまらない——墓守娘の嘆き』(信田、2008)、『母は娘の人生を支配する』(斎藤、2008)、『私は私。母は母。——あなたを苦しめる母親から自由になる本』(加藤、2012)などの書物が書店に多く並んでいることから、このような悩みをもつ娘たちが多いことが推測される。このような印象は私が臨床場面で受ける印象と重なるものでもある。信田(2008)は娘を苦しめる母娘関係として、「独裁者としての母—従者としての娘」「殉教者としての母—永遠の罪悪感にさいなまれる娘」「同志としての母—絆から離脱不能な娘」「騎手としての母—代理走者としての娘」「嫉妬する母—芽を摘まれる娘」「スポンサーとしての母—自立を奪われる娘」という6つのタイプをあげている。このような言葉だけを見ると恐ろしく感じられるが、実際の行動に移すかどうかは別として、どの母親にも心理的にはこのようになる可能性はあると想像される。

なぜ母親はこのように娘を無自覚的に束縛し苦しめる存在になってしまうのだろうか。清水(2004)は、中年期女性を対象に子の巣立ちと母親のアイデンティティーの関連について質問紙調査を行い、子の巣立ちが母親のアイデンティティーの肯定的な発達機会になること、専業主婦においては巣立ちに伴うアイデンティティーの拡散がみられたが、積極的・肯定的に母親役割に携わっていることや友人を相談相手とすることが子の巣立ちに伴うアイデンティティー拡散を軽減することを示唆した。

子どもの自立は親の子離れと同時に進むものであるから、自立は子どもだけの問題ではなく、親も生き方に変化が求められることになる。親が分離不安からしがみつくと、子どもは罪悪感をもち離れにくくなるため、親も子からの自立の課題に直面するのである。

### 学生と親への支援の実際

学生へのかかわり方としては、学生の主体性を尊重するために、学生自身はどう考えるのかを尋ねることが大切である。母がこう言ったから、母がこうしてほしがっているから、という理由ではなく、本人の意向を確認するようにする。そのさいに親と異なる判断をすることに、叱られる恐怖や、親が不安定になり荒れ狂うのではないかとという恐怖、さらに罪悪感をもちることがあるが、罪悪感をもち根拠はないことを保証する。学生からは親に自

分の意思を伝えるににくい場合に、それを代弁する形でカウンセラーが親に伝えることを望むこともある。カウンセラーが親子のコミュニケーションの仲介役になるのである。

母親への支援としては、母親のこれまでのやり方を責めるのではなく、依存対象が娘になり、すべてのエネルギーが子どもに向けられていることが問題であるため、まずカウンセラーが母親の話を聴くこと、依存できる対象となること、そして母親自身が心に余裕をもち子ども以外に生活の楽しみを広げていけるようにサポートする。親に対して、本人との会話において、親の考えを先に言ってその通りにさせようとするのではなく、まず本人の意見を聴くようにといった助言をすることもあるが、なかなかそれを実行することは困難である。しかし年月をかけて何回も面接を重ねるうちに、子どもへの発言を衝動的にする前に少し待ってこらえることができるようになる。面接のなかで娘にこうしてほしいという母親の願望を話す場合は、あくまで母親の願望として聴き、本人はそれについてどう言っているかを確認するというように、娘の思いと母親の思いを切り分けて聴いていくようにする。親の願望通りに娘に行動させようと、「先生からも娘に言ってください」とカウンセラーを利用して子どもを支配しようとするような例もふえているが、それはできないことを伝え、直接子どもと話し合うように勧める。家庭での決めごとについては、親のルールに一方的に従わせるのではなく、話し合いによって妥協点を見出すように伝える。なぜなら親がルールを決め力で押さえつける形で子どもに従わせている場合、そこから子どもの反発が生じてコミュニケーションが断絶していることが多いからである。子どもが家を出て親子のコミュニケーションが断絶しているような場合に、親が子どもの情報を子どもに内緒で教えてほしいと要求してくることがあるが、事件性の危険がない限り、子どもの了承を得ずに子どもの情報を教えることは原則としてできないことを伝える。まず親がすべきことは、子どもとの信頼関係を回復できるように自らの態度を変えることであると思われるが、子どもに向き合うのではなく、他の権威者を利用して自分の不安解消のために動こうとするのである。このようなやり方が、さらに子どもの反発と不信を招き、親子関係の亀裂を深めることになる。

このような母親への対応として、カウンセラーとしては、母と娘の境界と個別性を尊重しながらかかわることになるが、長くそのような生き方をしてきた母親にとって生き方を変えることは容易ではない。母親自身が成熟した依存すなわち自立に向かっていくためには、子どもを依存対象にするのではなく、大人どうしのなかで依存対象を見出す必要がある。母親と父親が不仲であり、父親が子育てに無関心、母親の子どもへの圧力に対して事なかれ主義的な傍観者であることが、母親の娘への依存傾向を助長しているが、この夫婦関係も長年にわたるものであるため変わることは難しい。従って、まずは母親が安心して何でも相談できる相手としてカウンセラーが存在することが重要である。子ども以外の依存対象に移行できないと子離れは難しいが、清水（2004）が明らかにしたように友人を相談相手とすることが一つの有効な手段となるだろう。

子どもの自立に伴い、母親も自立の課題の一つである感情コントロール、依存対象の移行、またアイデンティティーの再構築という課題に向き合うことになると言える。母親は青年期の子どもと同様に自立の課題に再び取り組まねばならないのである。このような母親の困難な発達を支えることを意識しながら関わるのが大切である。親子の関係性における自立と依存のあり方は青年期だけでなく生涯をとおして変容するものであるから、生



涯発達の視点をもって理解しようとする姿勢が重要であろう。

## 文献

- 藤田ミナ・岡本祐子（2010）青年期後期における娘のとらえる母親との関係 広島大学心理学研究, 10, 201-216.
- 藤原あやの・伊藤裕子（2007）青年期後期から成人期初期にかけての母娘関係 青年心理学研究, 19, 69-82.
- 平石賢二（2007）思春期の子どもをもつ親の心理的ストレスと子どもの人格発達に与える影響 平成15年度～平成18年度 科学研究費補助金（基礎研究（C））研究成果報告書
- 岩田淳子（2007）「現代の大学生の親子関係を考える」—企画趣旨と当日のディスカッション 成蹊大学学生相談室根年報, 14, 3-13.
- 加藤伊都子（2012）私は私。母は母。すばる舎
- 高坂康雅・戸田弘二（2006）青年期における心理的自立（II）—心理的自立尺度の作成—北海道教育大学紀要（教育科学編）, 56（2）, 17-30.
- 久世敏雄・平石賢二（1992）青年期の親子関係研究の展望 名古屋大学教育学部紀要, 39, 77-88.
- 三砂ちづる・竹原健二・嶋根卓也・野村真利香（2006）母娘関係尺度作成の試み 民族衛生, 72（4）, 153-159.
- 水本深喜・山根律子（2011）青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討 教育心理学研究, 59, 462-473.
- 水本深喜（2016）母親への親密性が青年期後期の娘の精神的自立に与える影響—「母親への親密性尺度」による検討— 青年心理学研究, 27, 103-118.
- 水島広子（2012）思春期の意味に向き合う 岩崎学術出版社
- 信田さよ子（1998）愛情という名の支配 海竜社
- 信田さよ子（2008）母が重くてたまらない——墓守娘の嘆き 春秋社
- 清水紀子（2004）中年期の女性における子の巣立ちとアイデンティティー 発達心理学研究, 15（1）, 52-64.
- 関千恵子（1980）人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 日本教育心理学会発表論文集, 22（0）, 572-573.
- 斎藤学（1999）共依存と見えない虐待 斎藤学（編）依存と虐待 日本評論社, 1-15.
- 斎藤環（2008）母は娘の人生を支配する NHK 出版
- 高木紀子・柏木恵子（2000）母親と娘の関係 発達研究, 15, 79-94.
- 高橋恵子（1968）依存性の発達の研究—大学生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高石恭子（2010）学生期の親子関係と大学における親支援のあり方について 甲南大学学生相談室紀要, 18, 49-58.
- 田中慶子（2010）未婚者のサポート・ネットワークと自立 岩上真珠編＜若者と親＞の社

会学 青弓社, 65-82.

滝川一廣 (2017) 子どものための精神医学 医学書院

竹澤みどり・小玉正博 (2014) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319.

渡辺恵子 (1997) 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, 18, 23-31.